

昭和二十二年三月十五日

ウズベック共和国タシケ

ント二八八ベカバード取

容所（建築、発電所工

事）

昭和二十三年七月十九日

ナホトカ出帆

七月二十二日

舞鶴港上陸 復員

昭和二十四年二月七日

和歌山市役所へ就職

昭和五十一年七月五日

和歌山市自治功労章受賞

昭和五十三年十一月八日

出納室長

昭和五十四年九月三十日

市収入役職務代理者を

もって定年退職

公務四十年勤務する間に習練の書道歴が、県展知事賞、市民特選、日本書芸院師範、青潮書道会理事、和歌山文化協会副会長等と大成された。

現在は書芸塾を開設し後進を指導するとともに、日々研鑽を積む書家であられます。

（和歌山県 林 三子雄）

私の青春 二十世紀前半波乱人生

和歌山県 南 口 佐 一

私も平成十一（一九九九）年十一月で七十四歳となり、振り返って見れば長い歳月ですが、過ぎ去って見れば歳追うごとに早く感じ、一日、一週間、一カ月はあっという間に過ぎ去る。ボケないうちに青少年時代、二十世紀前半の国民生活、教育、家族構成、私生活の状態と体験を書きたい。二十世紀末と比較し裏表のごとく総てにおいて変わったと思えてなりません。日本も、社会、生活は世界のトップといます。

少年時代は、貧乏人の子だくさん、私の家庭も姉四人、中で長男、弟二人、妹二人の九人。両親合わせて十一人。貧しい小作農の長男として生まれ、家は八畳、三畳、三畳の三間で寝起きし、私は当時、弟妹はいらないと思った。どこか家庭も七、八人の子供達はいたのです。その姉弟達とたまに会い、子供の当時は

話し語りすることは、今になり懐かしく楽しく、若い
て何よりも妙業と思います。

今はどうか。年寄りばかりで子供なく、末恐ろし
い。昭和六十一（一九八六）年九月に七番目の弟が死
亡するまで一人も欠けず、皆合わせて五百五十歳を達
成しました。両親は既に亡く、お母さんのお腹を痛め
た九人が達成したのです。詩に書く。

お母さんを偲んで

六十一年八月盆

一、朝の早うから 茶粥炊き 自分食べず

我が子にと 父を助けて 牛つかい

夜はおそくまで わら仕事 三男六女の

子養い 強い母さん お母さん

二、満州シベリア 四年間 思いは近く

距離遠く 夢でも会いたい 胸の内

夜空仰げば 流れ星 祖国に帰る

その日まで なつかし母さん お母さん

三、しつげきびしく やさしくて 釘と言え

金槌を 先を読める人になれ 家に帰り孝行を

思ってきたが すでになく

はかない母さん お母さん

お母さん、お腹を痛めた九人合わせて、五百五十歳に
なりました。孫も曾孫もその孫も、お守りください、

お母さん。詩に書く。これが私の自慢で、誇りでもあ
りません。

朝食昼食は別々になりますが、夕食時は大きな釜で
茶粥炊き。昼は米二、麦八で、ほとんど麦で、炊き上
がったときは麦は上になり下は米粒で、その下の米の
多いところを私に食べさせ、母や姉達は麦ばかりで
あった。百姓でありながらこの状態であった。

米のご飯であれば副食は要らない、漬物か味噌でも
よかった。それほど米は貴重で、米の飯と言えば正月
か盆、祭りのときであり、その米も今と違い真っ白で
なく、姉や私達はカラ白で人力でついたもの。お粥の
場合もさつま芋や麦を入れたときもあった。

甘味品にしても、大豆かそらまめの炒ったもの、さつま芋の蒸したものの。パンや菓子もあつたが買うことはできない。バナナにしても、病気になるって欲しいと言つても買うことはできなかった。本当に貴重なものでした。食べ物にしても、今とは比較できない。

通学は、服は制服でありましたが、ツギは何カ所もあり、履物はワラ草履で、その草履は母が夜遅くまでかかつて作ったが、それを朝早く店に持って行き、その金を家の暮らしの足しにした。そのときは小さいので作つて履かせたのですが、そんなことは余り気にもせず通学した。

スポーツにしても、運動会、招魂祭と年二回あり、騎馬戦、棒倒し、危険性はありませんが、けがをする者もなく、現在とは変わったものでした。

教科書や参考書も、姉達の使つたものを二代と三代持ち回りして大切に使いました。私達までハナ、ハト、マメ、マスでありましたが、以後サイタ、サイタに変わりました。

カバンにしてもランドセルはありましたが、大半の

生徒は布で作つた物で、これが当たり前と思ひ気にもせず。小学校三年生頃からは、夏休みに入つても家の手伝い、学校の農作業、兵隊に行つてゐる家への勤勞奉仕に半日過ごし、家に帰れば農家の者は牛に食べさせる草を線路の土手や道端で草刈りをして働いた。

どこの家庭にしても燃料は薪で、その当時ガスもなく、冬休みになれば友達や弟達を連れて野山に松葉や枯れ木を拾いに行つた。子供心に採り残しのみかんを探し、腹も減つており、食べるのは甘く楽しくおもしろく、寝ころび滑つたりで遊び、夕方家に帰つた。今は家の孫でも、よいみかんでも食べようとしない。今の子供達は、また親も、塾通いか勉強。世代もこのよりに変わった。

今は金さえ出せば何でも買えますが、当時は欲しくても買うことができず、ラジオもなく、中学（今の高校）野球大会放送を小山新聞店に聞きに行ったもの。今は各家庭にTVが二、三台もあり。子供の頃は警察官は恐ろしく、弟妹達が泣けばお巡りさん来たとおどしたものの。当時は先生、警察、大人達を偉く、恐ろし

い人に思ったものですが、今はどうか。

田植え時期になれば「猫の手も借りたい」の例え、学校も農繁休暇として三日ほど休みがありました。足らず、三日ほど休まされたが、姉達も会社に出るまで田仕事を手伝い、弟妹達の面倒見、それを思えば長男として当たり前。今の世代や子供達は牛と言えど牛肉か牛乳ですが、当時は牛の力で田を耕したり牛力で仕事をした。私も四年生頃から牛使いをしたものです。

一カ所の田は水は入らず、そのために水車で川の水を汲み上げ、親や姉達と交代で足踏みしたのです。当時は鉄は貴重で、軍艦や兵器になり、農機具が少なく、買えなかった。そのこと総てが、後進国の国柄に当時は似ている。

今、全世界で恐れられる麻薬ケシを私の家も一反六畝栽培し、昼間暑いときに傷をつけ、吹き出したヤニを朝早く二度採集。それを乾燥器に入れ、八百グラムほどできた茶黒い粉末を役場を持って行き、中国に売って日本の財政にしたことを子供心に覚えていま

す。日本政府もこのようなことをしたのです。農家にしても麦を作るよりも収益があり、その地目を申告したと思います。

青春時代

昭和十五年三月大崎東部高等小学校卒業で、この年は皇紀二千六百年に当たり、盛大に祝賀式をしたものです。そのとき既に中国と日支事変を始め、中支、南支と拡大していったのです。

当時は住宅や箱類は総て木材であり、製材所は景気よく、私は小西製材所に就職し、朝六時四十分から午後五時まで働き日給一円であり、昼間は製材で働きながら夜は青年学校に通う。これは義務となったのです。旧中学校卒業生を除き、以外は青年学校に入学、五年義務で、夜間通うこととなり、私も海草南部青年学校に入ったのです。

日本の政策は、食糧確保のために満州、蒙古に、満蒙开拓団と称して中国の土地を取り上げ二男坊三男坊の小学卒業生を送り込み、また大陸花嫁と称しておだ

て上げて送り込んだ。私は政治的なことは分かりませんが、ニュースでは国際連盟を脱退し、日独伊三国同盟を結び、最初は防共協定であったと思うが、アジアの国は面積は広いが独立国はなく欧米諸国の植民地である。そのために日本は大東亜共栄圏、八紘一宇の看板を挙げ、A B C D包囲線（アメリカ、イギリス、オランダ、中国）を破り、この国を追い払うと言ったのです。

青年学校の教育は、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍と、死は鴻毛よりも軽し、捕虜になれば恥と思ひ自決せよ、このように教育されたが、アメリカ、イギリスは捕虜になるまで国に尽くしたら捕虜になっても胸を張れる、これが国際的で、教育は恐ろしい。

昭和十六年、世界戦争に突入。初めは勝ち戦で、七年末頃から戦況は悪化、食糧、物資乏しく配給制になり、国民生活は苦しく、火鉢、釣鐘の金属類、金銀ダイヤ等宝石を供出。各家庭においても、苦しい中でも一円、五円、十円と国債を割り当てられれば文句一つ言わず国民の義務と思ひ買ったのです。職場におい

ても月月火水木金と休みなく、国の方針に従ったものです。

どこの町村でも、〇〇さんに召集（赤紙）が来たと言えば、結婚早々でも家や家族を捨て、家を後に出て行ったのです。その見送りの盛大なもの、小学生、婦人会、在郷軍人会、村民挙げて音楽隊で駅まで見送り。万歳万歳でありましたが、昭和十七年頃からは見送る人もなく、奉公袋を提げて家を出て行ったものです。

戦死してもしかり、初めの二人ほどは村葬と言って、町村長初め村を挙げて学校の講堂で花を供え、神仏式で盛大で見事なもの。それも二人ほどで終わり、あとは「〇〇さんが死んだ」と、哀れなものでした。

若い者、若い女性は軍需工場に徴用され、家では婦人老人が多く、若い男性は少なくなっていたのです。私も一年繰り上げられ二十歳徴兵が十九歳で検査、甲種合格。十九年十月二十日、満州要員として和歌山二四部隊に入営。当時は敗戦色濃く、父は六十一歳、母四十九歳、姉二人嫁いで、姉二人弟二人妹二

人。長男の私は後ろ髪引かれる思いで、見送りの人に「国のために元気でいきます」と言った。

当時のあいさつは「行って来ます」と言えず、鉄砲の弾のごとく帰れない、歳老いた両親、家は貧しい、心配もあり、口先では「元気でいきます」と言いながら、真実は恐ろしい、行きたくない、生きて帰る保証もなく不安でいっぱい。青春で女も知らず、納屋を建てた借金もあった。励みの出る新婚早々の人でも妻を残し、親達を捨て、一家の大黒柱が文句も言わず家を出て行く人もおるのだ。今の人達は、平和で、この胸の内が分かるまい。

和歌山の五日間は、毎日班長さんに連れられ和歌山城、和歌浦と外出し、のんきな五日間でありました。外出先には、誰に聞いたか、父や母が来ている。家では米粒の少ない麦飯であるのに、寿司、餅を持って、我が子可愛さ、これも食べ、あれも食べ、そのとき母は涙をいっぱい浮かべ「佐一、身体に気をつけよ」、その後は何を言っているのか分からない。声が出ない。そのとき私は、胸が締めつけられたごとく、何も

言えなかった。母は財布に金を入れたり米粒の多いところを食べさせてくれたりで、九人の中で特に可愛がられた母にこの時の別れが最後で、二度と会うことができなかつたのです。無念でなりません。気の強い半面涙弱く、仕事では父親以上で、仕事は段取り第一と、しつければ敵しかった。私の入営のときは、涙弱いためか家の片隅で泣いていたらしい。

十月二十六日真夜中、秘密の和歌山出発。戦局悪く密かな出発でだれも知らないはずが、どこで聞いたか、営門より小松原通り五丁目の電車通りの両側は、親姉弟達が手に手に旗やのぼりに我が子の名を書き、振りかざして名を呼び、すさまじいもの。今もその様子が目に浮かび、夢に見ます。私が門を出るとすぐに父姉妹達が目につく。私もこれが最後かと、右の端に寄り父の手をとる。一週間足らずの間に二、三年も歳をとった感じで頭がはげ、しわ白髪が一段と目につく。「お父さん行って来るよ。お母さんは？」と私は言った。父は「お母さんはお前に涙を見せたくないと言っていたよ」私はそのときばかりは涙が止まらな

く、頬を流れた。「お父さん、お母さん、身体を大事に」と私は言った。父は何か言っているが、言葉は出ないらしい。手を握りながら歩く。ここで別れた。和歌山駅から和歌山線で王寺経由、博多へと列車が走る。外の景色を見ながら、これが最後かと胸が騒ぐ。思うのは母のことばかり。母は学がないが偉い母、私にとっては何かがたい日本一のお母さんだ。今頃私のことを思っているだろう。幼いときは内ネズミと申しますか、母のそばばかり。友達から「嫁さんか」、私は「母さんだ」と言い、皆から笑われたものです。

博多から船に乗り、そのときの気持ちは、表面は外国のために身を捨ててと言うが、真実内心は恐ろしく、軍隊に行くのはいやだ。平和であれば船は汽笛も鳴らし、見送る人もあるだろうに、静かなもの。船は釜山に向かって走る。玄界灘、対馬海峡を通り、釜山に着く。釜山から京城（ソウル）、清津、羅津、図們と、朝鮮の東側を、軍用列車は十六両ほどであったと思います。

私達を受領に来た班長は、和歌山にいるときは本当

にやさしい、可愛がってくれ、よい班長と思っていた。だれもそう思っていた。列車が釜山を出て間もなく、あのやさしい班長はどこへやら、百八十度転回、鬼になったのです。今から君達に關東軍（満州軍）の精神をたたき込んでやる、と言うやいなや、目ぼしい二人を列車の中に呼び出し、「可愛がってやる、歯を食いしばれ」と拳を振り上げ十五、六発なぐった。手が痛いのか、次の班長が交代してなぐる。二人の初年兵は足下に伸びていた。胸ぐらをつかみ引き起こしたが、顔色は真っ青、口からは血を出し氣を失っていた。班長は私達に「逃亡したければ逃げよ、軍隊というところは地方のような生やさしいところと違うぞ」と怒鳴り、私達はみな肝を冷やしたものだ。恐怖と不安でいっぱい、だれ一人口をきく者はいなかった。私は自分に言い聞かせた。皆同じ人間だ、自分にできないことはない、今まで貧乏暮らしの生活をしてきたのだ、負けるものか。

十一月初め頃と思う、東安の駅に着く。プラットホームは霜で凍り、一面白く光っていた。班長は零下

八度と言った。雨が降り、寒いと聞いていたが寒さは肌にし差し込む、痛く感じる。列車を乗り継ぎ終点密山駅に着く。駅から約二キロメートルほどの所に立派な兵舎があり、それが六三四部隊である。丹波笹山七十連隊（猪連隊）と言ったものです。ここは馬河子ウマカシと言い、第一大隊、第三大隊と連隊本部があり、隣に六八病院と迫撃砲大隊もあって、兵舎、病院は内地よりも立派に見えた。

二大隊は国境近くの山ソウ屯に任務に就くと聞く。私は第一機関銃隊で白馬隊、営庭には銃剣術優勝中隊と標識が立っていた。

その日は思い思い故郷に便りを書き、内務の片づけでその日を過ごし、生水は絶対飲むなと指示を受ける。

自慢になるが、私は徴兵検査において筆記試験で満点を取り、母と連隊区より表彰を受けた。六三四部隊で中隊から軍旗歩哨六人、うち五人は幹部候補生で一般兵は私一人であり、その態度はよいと会報にも出、共に立哨した。清水正三は由良町出身（耐久中、後、

丸善石油製造課長）で、服装は新品であり、親にこの姿を見せたかった。同村同字の中西軍曹は第一大隊の衛生専任下士で、従兄弟の谷本勘一軍曹は連隊砲の班長で、運もよかった。胸部疾患になり、内地引揚げのサ号演習に参加できず、残留となる。

平陽八〇三部隊―八面通挺身大隊小豆隊に転属となる。八面通のこの土地は飛行場で、前にすり鉢を伏せたがごとき山があり、山の向こうはソ連との国境になっていたので。

飛行場は立派なものでしたが、飛行機は一機もなく哀れなもの。私達は毎日火薬代わりの砂袋を背負い戦車に突入の訓練であり、若い私でもつらいのに、父ぐらいの年齢の補充兵の人はつらかったこととしまいます。

五月になれば雪解けも終わり、四季の花が咲き、小休止の号令かかれば、寝ころび、煙草をふかし、語ることが何よりのひとときであった。当時満州には約六十万の兵がいたが、現役兵は少なく、老兵が多かった。兵器弾薬なく、ソ連が侵攻してきたのです。

私は、中国語の分かる富原伍長を長とし、松村兵長、私、小村二等兵が下士斥候となり、本隊と別行動をとったのです。

八面通から牡丹江を通り横道河子まで昼夜の別なく逃げるのに、二十歳の私でもつらいのに、牡丹江から横道河子の山の背を、開拓団の女性でしようか、乳飲み子を背負い、五、六歳の子の手を引き、腰に炊事道具をぶら下げ、ソ連の飛行機に追われ、兵隊さん兵隊さんと助けを求めて来たが、その人達を無残にも振り払い私達は逃げたのです。

あの人達は生きて祖国に帰っただろうか。頼る夫は兵に取られ、助けてくれる者もなく、海を隔てた我が祖国、周りは土地を取られた中国人、言葉も通じない。我が子の首に手が行った人もいるのだ。その人達を守り助けるのが兵隊、軍人でないのか。その兵隊は、我が身可愛さか、振り払ったのだ。衣服は住民に取られ裸同然。道には人馬が死に、夏のこと腐りが早く臭いがるものすごい。これが真実で、子が泣けばソ連兵に知れる、殺せ。これが戦争で、国民末端のありさ

ま。今の世代の人は本当にするだろうか、生き地獄とはこのことではなからうか。

私は横道河子にて終戦になり、八月十六日であった。

横道河子の街を説明する。周りは盆地になり、川幅二十メートルほどの美しい水が流れ、牡丹江からハルビン鉄道が走り、駅もあり、家並みは見事な白壁造り。家の周りに植木があり、一見別荘風で白系露人が住む。白系露人とは、ソ連人で共産党を嫌い中国に住む人のこと。

初めて見るソ連兵、これが戦勝国の兵隊か。日本兵の持っている物、時計、万年筆、シャープペン、帯革まで取り上げ、珍しいのか、ないのか。日本軍も日支事変当時、中国人をチャンコロ、クーリーと言い、人間扱いしなかったと聞く。平素、教育、訓練を指導した将校達は、大君のため、国のため、上官の命は天皇の命、絶対服従。白いものでも黒だと言えば「ハイ黒です」と答えなければいけなかった。「死は鴻毛よりも軽く」と教えた将校は、「捕虜になれば自決せよ」

と平素いばつても、人間関係は我が身が可愛い。私が聞くのに、敗戦後ソ連兵に女性が強奪されたり強姦されるのを見ながら助ける兵もなく、将校でも身を捨てて助けようとしなかった。ある老人が声を張り上げ「これもすべて兵隊さんのおかげです。お国のために尽くされた兵隊さんのおかげです」と歌ったそうです。これが終戦後のことでした。

学もない国民の末端の者ですが、軍の上層部は、日本は神の国であり、戦をしても負けることは絶対にならない、大和魂があるのだ。大東亜共栄圏を確立し、一億国民火の玉となり「鬼畜米英撃ちてしままん、勝つまでは」、それを国民は信じ、苦しい中でも務めとして堪え忍んできたのです。飛行機に竹槍、戦車に爆薬を背負って飛び込み、敵艦に片道の燃料で突っ込み、人間魚雷で敵艦に、これが軍の方針であった。今考えれば阿呆かと思う。素人の私でも、何事にも予算、計画があり、戦するには、食糧を例にとれば、港、海上輸送、揚陸場、前線、各一週間として約三十倍必要で、途中沈没すればパーである。日本軍は食糧は現地調達

(盗人なり)でした。上層部は、自分の罪を暴かれるのを恐れたか、自分の命が惜しいのか、玉砕を呼びかけたのです。今の社会では、自殺するのに他人を巻き添えにするのは卑怯で許せないこと。

横道にそれましたが、日ソ戦は、されるままだった。牡丹江近くの拉古にて日本へ帰るといふ目的で大隊編成されたのですが、それが実際はソ連復興五カ年計画の作業大隊編成であり、拉古には三、四日ほどで、小雨の降る中アメリカ製のトラックに乗せられ、一台に二十人ほど、夜は寒いため身を寄せ合い悪路を東に走り、綏芬河からソ連に入ったのです。当時は知ることなく、連れて行かれるままに着いた所は興凱湖畔であった。初めは日本海と思いき喜びの気もあったが、その夢も覚めて、水は淡水で湖と分かりがっかりしたものです。テントを張り幕舎を作り、翌日から作業である。

朝、大きな鎌と砥石を各一個受け取り、自動小銃を持ってソ連兵と作業に出かける。鎌は、今の草刈機ごとき、柄は二mほど、刃は日本の鎌の形で、長さは

三、四〇cmある。砥石は三cm×五cm×二〇cmのコンクリートで造ったもので、このような道具でノルマを求めめるが、食事はソ連の担当者に搾取され、実際の半分である。昼食は黒パンで、明日の昼食のパンは前の晩に分配する。置いておけば、飢えた者同士、盗まれてしまう。分配と同時に食べ終わり、明日の昼食はなし。このような繰り返し。

実際は黒パン三〇〇gであるが、我々には二〇〇gもなかった。黒パンは日本と違い、国柄か、小麦や大豆、穀物を粉にし、粕を取らずにイースト菌で発酵、塩味で焼いたパンで、少しすっぱい感じで、朝晩は中身は小豆、高粱の粒一〇〇ほど、米ぬか・油・鮭・野菜雑炊、シャブシャブで、八〇〇ccほどでありました。実際はパン三〇〇g、穀物二〇〇g、油一〇g、肉魚一〇〇g、砂糖一八gありますが、その半分ほどで、ソ連担当者に取られ、丸一日ないときもある。今にして思えば当然と思います。

仕事はダバイダバイと追い立てられるが、栄養失調になろうが病気になるほうがソ連側は頓着なし、薬もな

かったのです。柳に似た葉を煙草がわりに吸ったものです。

そのうちの八十人ほどが九月中頃、草刈りをやめ、その目的は何であったか私には分かりませんが、秋の気配ただよう寒さ深まる頃、またしてもダモイ東京とだまされてトラックに乗せられ、どこに行くやら分からない不安のまま悪路をゆられて行った。何どきか経ち、ふと気がつくと興凱湖から北に向かい、私の元いた密山付近である。見ると赤れんが建ての迫撃砲大隊の兵舎で、その前を通っている。よく見ると密山六八病院でないか。少し行くと自分の入隊した六三四部隊だ。兵舎が見える。驚きの余り私は叫んだ「おい満州だ、六三四だ」。皆が立ち上がる。トラックの中に六三四部隊の者はだれもなく、胸に迫る懐かしさの余り眺める。営門、兵舎、弾薬庫、そのままであり、病院、兵舎、建物はすべて無傷で残っているのがむしろ不思議に思い、びっくりしたことは当時の私の実感で、戦場の跡とは思われなかった。

東安の街並み、汽車の機関庫は何事もなかったこと

くそのまま、そのときの私は情けなく思った。トラックは北に走る。東安と言えばソ満国境の重要地点で、鉄道も十路になっており要所だ。虎林を通り虎頭に着く。どこも戦場の跡すらなく、ウスリー江は目の前をとうとうと流れ、川向かいはソ連のイマンの町と聞く。またこの虎頭は大変な激戦地と、後に橋本県連会長に聞く。

約八十人ほどの者が毎日船への積み込み作業、何を積み込んだかと言えば戦利品ばかり。武器弾薬はないが、食糧品、甘味品、被服等で、日本軍のものすごい物資であった。砂糖、煙草、乾パン、米、麦、大豆、机、椅子、建具、ガラス、畳の果てまで、ソ連が満州に侵入して、自分の国は傷まず中国を荒らし、十日ほどで自分の国に持ち込んだのです。この期間中、大つばらに言えないが、栄養をとり、衣服を取り替え、大助かり。

その作業も五日ほどで終わり、トラックに乗せられて元来た道を移動ごとに東京ダモイとたまされ、着いた所はアストリハンカ収容所で、良い後は悪いの例

え、魔の第一回シベリア抑留越冬生活になったのです。ここは北緯にすれば北海道旭川くらいでしょうか。ただし大陸性気候のため酷寒地で、寒さはひどい。興凱湖畔で石炭の積み込み作業であった。

収容所（ラーゲル）は、馬小舎を改良し、二階にして小丸太を並べ、その上に敷草を敷き、寝るところは一人に七、八〇cmほどで、通路は二本あるが、出口は一カ所。中にドラム缶を置き、暖を取るため焚くので、人のいきと燃やすために、だれ言うもなく一階は寒帯、二階は熱帯と言ったものです。空気は乾き、衣服は着の身着のまま、身震いするほどのシラミ、卵とも一人に万ほど繁殖し、体中シラミに吸われ肌はこけ、松の木のごとくガサガサ、入浴の設備もなし、身体油気なく、枯れ木を水に漬けたごとく、水をはじく状態でなかった。敷草に火でも付けば、前に書いたが、通路は二本、出口は一カ所、窓もなし、そのこと思えば恐ろしく、ゾツとする。狭い馬小舎に二百七、八十人はいたと思います。このような環境の中で仕事を追い立てられ、散髪はもちろん、汚れた顔や手を洗

うこともしなかった。

目が血走り食事の分配を見つめ、あつという間にシャブシャブの夕食を食べ尽くし、食器をなめたものです。明日の昼食も腹に入れ、この繰り返し。後は寝るだけ。横になり、眠るのは疲れのためか一瞬で、空腹のためかシラミか束の間で、すぐに目が覚めてしまふ。それも夜昼なしの現象で、悪環境の生活、次第に体力が消耗してまことにひどい状態となるが、餓鬼道の極限というか、人間としてこれより下はなく、道端で死んでいる猫を持ち帰り、料理して内蔵の果てまで食べたのです。野ネズミなんか上食、焼き鳥と言ったのです。ほとんどの者は栄養失調にかかり、鳥目になり、夜は星か月しか見えない状態になった。

朝晩の行き帰り、パンのかけらか煙草の吸殻をポケットに入れ、紙に巻いて吸った。よろよろとしたこの姿、戦前は世界に誇った関東軍の変わり果てた哀れなこの様。シベリア抑留生活で、ある日のこと、二人に一匹の塩鮭を食べて喉が乾き、水を飲み赤痢になり、最初になった者は二、三日で回復するが、後にな

るほど回復が遅くなり、そのため作業もできず、一時間に二回以上も便所行きであり、便所づくりの作業。

その便所は、幅二〇cm、深さ五〇cm、長さ五mほどの穴の上に板を渡したもの。糞もなく、夜になれば鳥目で目が見えない。出入り口近くでやり、人間のするこゝとでなかった。寒さのため余り臭いもなく、片づけやすい。抑留生活全般において、目に見えない病気が駄目。例えば、腹痛、下痢、神経痛で体温三十七度以上あれば休ませてくれたものです。

このラーゲルで私の実感したことは、シラミが人間の死期を知らせると私は感じた。それは、今まで体内にいたシラミは、血がまずいのか冷たいのか、首筋に這い出してくる。そのような状態になれば友は朝起きてこない、死んでいる。シラミは時を告げると思った。

死んだ友を毛布に包み、引きずって一つの戦車壕に六人ほど入れ、雪を被せただけ。凍結期のために土に埋めることもできなかった。肉親もおらぬ哀れなもの。真実を家族にも言えない。本当に気の毒で、友と

ともにこんな所で死ぬるものかとよく言いながら、死に際に「もうあかん」と言う。互いに「もうあかんは言わん」と言いながら、「あかん」と言って死んでいった。

夜になれば月はこうこうと輝き、シベリアで見る月は冷たく、狼は吠えれば至る所から吠え出す。不気味で空を見れば涙が頬を流れたのです。この地において二十人余り死んだと思う。同県人の有田市E君、和歌山市K君、長野県A君。冥福を祈るばかり。

コルホーズ、ソホーズ農作業

ソ連側も、アストリハンカで犠牲が多いためか、二十一年四月中旬頃か、死者の片づけもせず、いつものごとくダモイ東京と貨車に乗せられ、南は日本海だが北に走り、着いた所はラドである。ここは満州虎頭とはウスリー江の対岸で、イマン市の南、コルホーズ、ソホーズと言ひ、国营農場であった。

この農場は主に馬鈴薯を作っていた。大根、ニンジンもある。大根は日本と違いテンサイ糖で、砂糖を採

ると聞く。なるほど甘く感じた。初めは馬鈴薯を生で食べたもの。うまいがエグイと思ひ、後は一斗缶で炊いた。

仕事はトラクターで種芋を植えていくが、その後私達は埋まっていなところを足で土を被せていくので、作業は楽で体力も回復し、大根、ニンジンを生で食ったもの。ニンジンも日本よりも一回り小さいが変わりなく、赤かぶもあり、日本は白だがソ連は赤である。塩も日本は精製しているがソ連は岩塩でニガリがあり、薄茶色をし、お粗末なものだが貴重なものでした。シベリアの土地は凍結期は戦車も川の上を走りますが、溶ければ土はボコボコになり、作物は良好で、短期間で収穫できるのです。馬鈴薯は一樣にものごくでき、見事です。私は、馬鈴薯が凍って溶けて乾燥すれば澱粉ができると初めて知りました。昨年の芋が凍り、それが表面に出て乾燥すれば、皮はへしかみ中は白い粉、これが澱粉で、湯で混ぜて食したのです。ソ連の制度は、十月過ぎれば作物は解放になり、誰が取っても罰にならないそうです。

私達は八月末頃か、この地を後に移動となり、着いた所はれんが工場で、良い後悪いとよく言うが、そのとおりか、毎日の仕事を大きく分けると、土砂の混合プレス、型入れ、乾燥、窯入れ、窯出し、積みみの仕事で、相手はれんがで手の荒れがひどく、ウエスの手袋が支給されますが、すぐに破れ血豆ができ、それが三交代で、つらい毎日であった。

ある日のこと、ソ連側から「技術者はいないか」、私は左官と名乗り出た。れんが工場におれば命を縮めると思い、なるようになれ、私は家で粗壁を塗ったこともあると思い、大工、鍛冶、建具で三十人ほど、トラックに乗せられ町に連れて行かれたのです。

ソ連の建築は、丸太を積み上げ、キズリを打ち、セメントと砂でモルタルを造り、その中に早く乾かすためにイビヨースク（石炭に似た物）を入れる。そのために一時間のうちに5cmほど厚く塗ることができるからです。ソ連の左官（シカトール）はれんがゴテでぶちつけ、なすり上げるので、私は鍛冶屋に日本式のゴテを作ってもらい、日本式に角や段のところを定規を

使って作業し、出来上がりは美しく仕事は捗り、ソ連監督からよい労働者（ハラシヨラポータ）と誉められたものです。

監督はカミムリと言い、東洋系で身長低く、頭髪も黒かった。人間的にもよく、私をソ連兵の散髪屋に連れていってくれたことは今も忘れることもなく、後にソ連営倉に入れられたときも恩になった。

日曜日は地方の壁塗りやペーチカの修理もしてパンや馬鈴薯をもらったものです。初めのアストリハンカと比べるとシラミも少なく、人間は食べさえすれば体力もつき、相手の気心も少し分かるようになったのです。

ソ連営倉を体験

十一月初めのこと、仕事場に鶏が迷い込んできた。

私は内心しめたと思ひ捕らえ、夢中になって首を十回ほどねじったら、首がちぎれて血が飛び散ったので、鶏を雪に埋めて血の後始末をし、その日は何食わぬ顔で帰り、翌日それを持ち帰り、ナイフを借りて料理に

かかった。それが、私にとって大問題が起きたのです。薄暗い所で料理に夢中になり、その日は明日が明治節の十一月二日、今も忘れはしない、ひょいと顔を上げれば前に軍曹（セルジャント）が立っているではないか。アッと思つて鶏を隠すが、ナイフを持っているたのです。

少しずつでも友とカシワの肉を分け合つてと思つたことが、この始末。早速日本の井上中尉を呼び出し、点呼である。十一月になれば雪が降り寒い。そのセルジャントは通訳を通じ語気荒く「この日本兵は私を殺して逃亡しようとした」。私は井上中隊長に「そんなことはない、鶏を料理していた」と言うが聞き入れられず、「この者を営倉に入れる、使役を五人出せ」と中隊長に言い、私を引き出したのです。ソ連の営倉とは、有刺鉄線の杭のところに柱を七〇cm四方に四本立て、柱を倒れないように杭に縛りつけ、私を中に入れて外から板を打ち、青天井。約七〇cmほどで身動きもできない。ソ連の営倉はつらかった。私は第一号で、自慢ではないが、外に入れられた者は少ないと思う。

シベリアの地は大陸性気候で、十一月になれば体感温度はマイナス四十度くらいになる。夜はものすごく冷え込み、月星まで冷たく感じ、身体を動かさなくては凍傷になると思うが箱詰め同然で、井上中尉が何回となく来て、南口頑張れ、身体を動かせと励ましてくれた。私も、こんな所で死んでたまるか、冷えきつた身体は変調を来たし、少食であるのに用便を催し、垂れ流し。幸いなことに風はなく、風速あれば体感温度はぐつと下がり、シベリアの夜明けは遅く生きた気もしないといふのはこのことと思つたのです。明るくなつてきたときはほつとし、生き返つた気がした。

汚れた服を取り替えて歩哨室に連れて行かれ、軍曹は私に「二度としないか、今度やれば殺すぞ」と言い、拳銃を発射し弾は耳元をかすめて後ろの窓ガラスが飛び散つた。私は一瞬首をすくめ、生きた気はしなかつたが、射撃はうまいと今思う。それにしても、軍曹は鶏の料理を見ながらナイフに重点を置き、日本兵への見せしめか、自分の誇示かと私は思います。そこへ左官の監督カミムリが来て「ハラショラポータの南

口」と言い、私は解放されたのです。

井上中尉殿は綏陽の貨物廠の主計中尉で、和歌山県すさみ町で製材所を営んでいたと聞き、私が復員したとき、中尉殿の状態を聞きに奥さんと娘さんが来られ一泊されましたが、その後大阪の方に移転されたとき、生きておれば九十歳以上で、温厚なお人でありました。また監督カミムリにしても、三年抑留中印象に残るソ連人で、その奥様も思い出します。

伐採作業

凍期に入り建築作業もできず、十一月中頃か、大工、建具、鍛冶屋職人を残して私達は山奥に連れて行かれ、駅もない所で降ろされ、約一キロほど登った所に立派な収容所があった。ドイツ捕虜が作ったのか日本兵が作ったか、二百人ほどおりました。

大きなマサカリと二人挽きの鋸を持って作業にいく。大きな松、梅、落葉松が立ち、白樺林もあった。私は小学卒業後製材所で働き、ある程度材木のことば知識もあった。鋸のことも知っていた。三人一組で、

木を上に向け切り倒す。切株の皮をはぎ、松葉を焼く。一人当たりのノルマは何立方メートルか忘れたが、怪我のないようにノルマを気にせず、倒すときは声をかけ合い仕事をした。立米計算は、日本であれば石数ですが立米も同じ、仮に直径四〇cmあれば〇・四×〇・四×長さ六mで〇・九六立米であり、約一立米です。余り仕事してもノルマを上げられるだけなのでほどほどにし、約二〇%で初めブロー（悪い）と。いつものこと、そんなことは頓着しなかった。

初め悪いと言われたが、日が経つにつれて言わなくなった。作業の行き帰りには白樺の林を通る。林に入れば明るく感じ、その幹に傷をつけ飯盒に受けておけば、帰りには五〇ccほど樹液があり、それを飲んだもの。またこの茸食べられるとか毒茸とか、日本人は食べることについて、誰が考えたのか、偉いと思う。五葉の松があり、松の木を倒せば松かさがあり、その種は木の実（椿）の種ほどの大きさがあり、ソ連人にはこの実は貴重な甘味品であり脂肪があるが、余り食べ

ると下痢をするピーナツ（落花生）に似ている。また名はシーシカと言う。ソ連人の甘味品と言えばカボチャの種かヒマワリの種で、松の実は上級の品物であった。

当時のソ連兵は教育程度が低く、下士官でも百までの数字は読めなく、それでも自分の国は戦勝国で、生活程度は低くてもこれがあたりまえと思っていて、日本人から見れば哀れに思える。また新聞にしても一月遅れを読んでいるのです。家にしても、自分の家が自分のものでなく、仕事のできる場所に移動しなくてはいけない。そのために家財道具少なく、着るものも男女同じで、靴下にしても風呂敷でよいのだ。五〇cmの布切れ二枚で一足の靴下になるのです。二トン車あれば三世帯ほどの家財道具は積み、寝台、植木鉢、着るものはトランク三個か四個、あとは鍋と釜で、我々から見れば哀れなもの。

私は抑留生活の三年間シベリアの地を転々とし、最初の一年間は食糧を欠き乏しい食事にシラムと悪環境で大勢の犠牲者を出し、二年以後は環境もよくなり恐

怖感もなくなり、噂では「日本に帰している」と話が出るようになった。

俘虜が俘虜を 日本人が日本人を裁く

昭和二十二年頃、ソ連政府は健康そうな日本兵を、将校を除きある所に集め、十分な食事を与えて作業せざるマルクス社会主義の教育を教え、その者達を各収容所に四、五人配置し、レーニン、スターリンを神のごとくたたえて作業の行き帰りに赤旗やインターナショナルの歌を歌わせ、夕食後「日本兵が多く死んだのは、日本の糧秣係が糧秣をソ連人に横流し、そのため皆の食事は乏しく多くの犠牲者が出た。それにより今から人民裁判を行う」と言い、糧秣係を呼び出して「この者は皆さんの食糧をソ連人に横流しし、皆を苦しめた」「そのことに相違ないか」、皆が「そうだそうだ」とやじったのです。それに反対でもすれば帰るのが遅くなるので「そのとおり」と全員が発言し、その軍曹の日本糧秣係は認めるほかなかったのです。「その罰により、ただいまから朝晩の便所掃除」「それを

皆に報告せよ」「食事半食」「胸に肩章をぶら下げよ」
との判決で、可哀相なのはその軍曹で、日本兵が日本
兵を裁いたのです。裁判にかけるのはソ連人ではない
か。それなのに私達も同意したのです、情けない哀れ
なことで、これが人間の本性か、と胸に手を当てる。
その軍曹は朝晩二回便所掃除をやり、「○○軍曹、た
だいま便所掃除終わり、帰りました」。本当にむごい
ことでありました。日本人は相助け合ってこそ同志な
のではないか、環境変わればこのようになるのか。

私も二十三年五月五日頃のこと、脱肛になり、それ
が認められ一カ月はどラーゲルの軽作業で、七月十日
ナホトカ港からの病院船「高砂丸」で看護婦さんから
「御苦労さん」と言われたときは、懐かしさの余り、
嬉しさと重なり胸がいっぱい、涙が止まらなく、夢か
と思ひ、看護婦さんの身長が子供のように小さく思っ
たのは実感でございませう。

七月十二日頃、私は家に内密に帰るつもりでいた
が、舞鶴駅には姉弟妹が来ていたのに驚き、聞けば新
聞に出ていたと。「皆達者か、変わりないか」。弟は変

わりないと言う。ああよかった。家に帰れば母はいな
い。仏壇に灯がともっている。昨年十二月二十一日お
まえのことを言いながら死んだと聞き、力が抜け、一
年遅かったか、もう一度会いたかった。母は近所の人
に「八人の子と代えられん」とよく言っていた。神に
祈り、拜みに行き、帰った人に尋ね歩き、私のことを
思い続け、身体を壊した。今も母を忘れはしない。私
は特に母親思いというのではない。私の母は日本一
だ、世界一だ、私は母のことをそれほどまでに思った
か、親が子を思う万分の一も私は母を思ったか、反省
をする。今は平和で、母親がわかるまい。

シベリア墓参 沿海州

平成三年八月二十日より七泊八日の日程で、西川団
長外二十七人はシベリアの一部沿海州の墓参に参加す
ることになり、新潟東急インに集合、結団式をやる。

前日ソ連において政変が起き、墓参が危うくなり、決
行可否か協議、ここまで来て「やる」と一致。あとは
政府に託し、飛行機である。運よくその日は日ソ通商

都市会議、日本から新潟、舞鶴、長崎、神戸市長達がハバロフスクに出発するので、その便に乗れると中央から連絡が入り、墓参が可能になったのです。

十四時出発、佐渡ヶ島を左に見、日本海を北に海を一時間、陸を五十分ほどでハバロフスク十六時ですが、時間差が一時間で十七時とする。天候よく最高の日和。上空より見れば黒竜江（アムール川）は大蛇のごとく曲がりくねって、大水害の後で黄色く、流れている景色は壮大。考えれば、抑留当時は墓参なんて考えもせず、夢にも思うことはなかったが、これが現実か、終戦、帰国、墓参、ソ連政変、水害後、重なる出来事一致し、有意義で、何が偶然かと思った。

ハバロフスク空港より墓参に向かう途中、レーニン広場には五千人ほどが集まり、四方からどんどん集まっていた。ソ連の国旗なく、ロシアの旗を正面に立て大きな声で何か言っている。通訳は「エリツィンを支持し、ゴルバチョフが生存」と言っていた。

ハバロフスクの墓地は二カ所あるが、一カ所は日本が金を出しゴルバチョフが参ったためか立派な墓地

で、日本から観光客が十人ほど来ていた。遺族の方であらうか。もう一カ所は、ソ連兵士の墓の隣にあり、昨年秋季、新潟の人達がお参りしたらしく、木札がありました。私達は一五cm四方、長さ二mの墓標を五本持参し、正面に「友よ、安らかに眠れ」、片方に「平成三年八月吉日」、裏に「全国強制抑留者協会」と書いた柱を立て、日の丸の旗、オハギ、煙草、酒、花を供え弔辞。十野和尚の読経の中、各自焼香。「異国の丘」の歌で終わり、観光しながらホテルに帰る。天井には見事なシャンデリアの電球がある。半分しかついていない。料理にしてもキュウリであり、私達は「キリギリスと違うぞ」と笑ったものだ。一流国際ホテルで入浴しても、水は出るが湯が出ない。寒くてシャワーもできないありさま。ソ連は夏場は湯が出ないそうです。それにしても疲れをとることもできない。温度は日本と変わらないが、木陰に入れば涼しい。レーニン広場にはきょうも三千人ほど、仕事もせず集まっている。

私達がバスから降りれば、子供達は懐っこしそうちに

集まってきてメダルやソ連兵の帯皮を売りつけに来る。これが終戦後、日本の子供達がアメリカ兵にガム、チョコレートをねだる姿に等しい。子供でありながらタバコ、金をほしがるところやその状態を大人の人はどう思うだろうか。ガム飴をやる、なりすがたで来るので可哀相に思う。極東の軍港ウラジオストックに着く。立派な港で今は自由に写真も撮れる。海水浴をしている。景色のよいレストランで昼食をとり、食事の後、墓地探しである。

長い歳月で、当時のことを知る人が少ないのか、夕方近く、警察官により場所を探し当てたのです。蚊がものすごく、殺虫剤のスプレーも少しの間である。子供達は斧を持って手伝ってくれ、墓標を建て、同じようにお参りを済ませ、子供達に菓子、鉛筆をやる。

このホテルは湯が出たので大助かりで、二度も風呂に入ったのです。次の場所はスーチャンで、距離にすれば二十キロある。途中、川辺で昼食をする。景色がよいが蚊が多くて悩まされ、焚き火をして草を被せて煙でいぶしたので少しは少なくなる。新聞紙を敷き、

ハム、ソーセージ、黒パン、キュウリ、ごちそうで、スイカもある。ソ連のスイカは、種は日本の倍ほど大きく、味は日本よりも甘く感じた。途中出会い車はすべて日本製で、貨物車はトヨタや日本の店の名を書いた車である。

この墓地は九十人ほどの死者だそうです。この地は、ウラジオストックやナホトカと違い、景色や写真は撮ることはできないので気をつけよと。どの墓地も四十五年の歳月で当時の面影なく、木は生い茂り直径一五cmほどの木に成長、足の入れ場もないほどで荒れ放題、本当に可哀相だと感じ、自分の身を振り返ったのです。

次はスーチャンの墓地である。この墓地は、北朝鮮で終戦になり、日本へ帰るとだまされ、船でこの地に運ばれたそうです。この地は炭坑で、「今なお残るそのときの収容所はここだけ」と聞く。れんが建てで、二棟は荒れているが一棟は今もソ連の人達が暮らしている。二千人ほど収容されたそうで、八百人ほど死んだという。墓地も山の中腹にあり、登るときにソ連の

住民が墓標を担いで登ってくれ、そのことは何か、時代も変わり懐かしく感じ、私はその家でトマトを御馳走になったのです。

ソ連のガラさんを道案内にナホトカ墓地に向かったのです。この墓地は、仕事できなく身体の弱い者を掃すためにソ連がこの地に送り、日本海を見ながら死んでいった人達が多いと思います。墓地は二カ所であり、面積にすれば五町歩ほど（五ha）あり、墓標は1m、長さ2mで金具で姓名を入れ、日本が金を出し、観光のためか立派なもので、奥には（日本政府）日本人の墓と書いた石碑が建ち、佐藤内閣総理大臣と記す。ただしこのような所はよいが、何百カ所かの墓地は可哀相に思えてならない気がいたしました。この場所には墓標を建てないが、五カ所に建て、七カ所の墓参を終え、ナホトカ発夜行列車で十九時に出発したのです。

シベリア鉄道で、列車から左側は旧満州であり、暗くて分からないが、あの山は、あの辺はどこと語り、満州から見たソ連領とシベリアから見る満州は違いま

すが、懐かしさと言いますか、何か胸に来るものがあり、眺めたのです。

五十キロくらいのスピードか、十七時間でハバロフスク駅に着く。昼食後は遊覧船で黒竜江（アムール川）を遊覧し、川の大きさ、また水害で今も水は濁り、中州でも下津町の面積ほどの島があり、川辺には造船所もあり三千トンの船が走っている壮大な川である。橋もあり、いかに大きいか。ホテルに一泊し、明日帰ると思えば嬉しい。

私も墓参に参加し気づいたことは、半世紀近く経過し、今なお訪れる人もなく、荒れ果てた酷寒シベリアの地で眠っている友の墓地が何百カ所もあることを忘れてはいけない。

後戻りしますが、抑留中はいかに残酷であったか、戦友とは身内同然で、何より大事な友であります。自分の確保した食べものは腐る手前まで手放すことはしなかった。作業中において馬が死に、どこそこに埋めたと言え、夜中に組を組み、周りは鉄条網でも歩哨の監視の目を盗み馬の足を持ち帰り、一斗缶で炊

き、むさぼり食いしたもので、このようにだれしも危ない橋を渡ったものだ。

ソ連のドクトルにしても、いい加減な診断でABCの段階に分け、作業の分担をしたのだ。それも尻の皮により仕分け、病気になるうと頓着なく、薬もなかったのです。ソ連の国柄か、これが当たり前で、世界の国民も皆このようなものだ。国民生活にしても、貧しい中乏しくても不服不満を言わず、自分達の国は一等国で戦争に勝ったのだと国民に思わせ、スターリンを神にし、私達から見れば井戸の中の蛙で世間知らず。煙草にしても、紙に巻いた上物はパピロスと言い、一般の人はマホルカと言い、タバコの木を、葉と幹を屋根裏で乾かし、それを刻み、新聞紙に巻いて吸っていたのです。

私は抑留中、国境を四回通り、シベリア墓参で気づいたことは、ソ連は軍事国で、その防備と申しますか国防力は目を見張るもので、道の両側には鉄筋コンクリートでトーチカを何重にも造り、民家にしても高さ1mほどのところにれんが一枚分ほどの穴を開け銃口

に。その当時日本は日独伊防共協定を結んでおり、独ソ戦で日本がドイツに加担してソ連に侵入しておれば、ソ連の子供に殺される羽目にと思ひ、恐ろしく感じましたが、ノモンハン事件にしても日本軍はひどいものだったと聞きました。

日本の軍の上層部は国民に対し鬼畜米英と言い教育したが、アメリカは、ベトナムにおいてゲリラ戦となり、アメリカの一将校が部落を焼き払い住民を皆殺したため、その将校を軍法会議にかけたと新聞、テレビで見、私はそのときアメリカは紳士の国だと思つた。戦争は、やるかやられるか、殺すか殺されるかの境で、ゲリラ戦となれば農民は即兵隊になるのです。捕虜にしてもしかり。それまで国のために身を捨て尽くしたのだ、捕虜になっても胸を張れる、この考え方一つにしても天地の差あり。人命の尊さを教えられた。

二十世紀 初めと末

二十世紀もあとわずか、振り返ってみると、日本内

外は国民生活すべてにおいて化学、医学の進歩は目を見張るものがある。私達少年時代の漫画が現実になり、コンピュータでは自分の位置がどこにあり、北緯、東経何度と分かるその当時想像もできなかったことが起きている時世で、戦争はしてもさせてもいけないと私達の世代の者は実証している。半世紀以上過ぎても傷痕は残る。

残留孤児問題にしても、身内の子と知りつつ、我が身は七十過ぎ、歳をとり言葉も通じず、それがため名乗ることもできない人もいると思えてなりません。戦争をして家族はバラバラ、苦しみ、犠牲になるのは国民であると私達世代は立証をしています。果たしてどうでしょうか。私の家庭でも、子供達はなるほどそのようなことがあったのかと聞いてくれるが、孫になれば、昔は昔と聞き流される。これが現実ではなからうか。

私達子供の頃はどこの家庭も五、六人の子がおり、八、九人の家庭は多かった。今は、私の班を例にとれば、戸数十二戸で、六十五歳以上十人、小学生はなく

中学生二人、年寄り多く子供はない。子供あつての国の力と私は思いますが、間違っているでしょうか。

北方領土問題

老いた一国民として、日ロ両国は再三話し合いながら明るい見通しもなく、腹立たしいものがある。何も分からぬ私ですが、日ロ双方は歴史的にいろいろあり、一九〇四、五年日露戦争、ソ連革命での日本軍のシベリア出兵と一九四五年の日ソ戦は、中国の土地を戦場にして荒らし、結果は、戦利品として満州の建具、豊の果てまでロシアに持ち去り、六十余万の日本軍を国際法の糧秣も与えずにソ連復興五カ年計画に三年、四年と強制労働させ、そのために六万余人の尊い命を犠牲にしているのです。ある墓地は日本が金を出して整地し観光地をしているが、今なお残る何百カ所は荒れ放題。そのことを思えば、お互いに言い分はあるだろうが、二十世紀に起きたこと、出来事はともに水に流してテールに着き、手を握り、地図を見て、千島列島全部とは言わん、一部のクナシリ、エトロ

フ、シコタン、ハボマイ四島を返してほしいのです。
二十世紀のことは二十世紀で、戦後も半世紀余り過ぎ、お互い隣同士でないですか、持ちつ持たれつ、助け合つてこそ平和がある。肩を組み、手を握ることを望むものです。

私も日ロ親善の一環として、平成十一年八月二十二日から八月三十日までシベリア墓地を六班に分かれて墓参し、亡き友の冥福を祈ります。八月二十九日にハロフスタ市において日ロ合同慰霊祭も行い、日ロ双方お参りすると思います。これひとえに日ロ親善の一つと思っております。

我流の短歌

一、お母さん 元気でいてね 祈りつつ
帰ってきたが 一年おそし

一、仏壇に 四年の歳月 気苦労を

冥福祈り なすすべもなし

一、身を捨てて 祖国の為に 銃を執り

戦後シベリア この世の地獄

一、青春は 元気で征きます 心では

不安恐怖で 胸打ち騒ぐ

一、今日も又 鋸タポール 肩に掛け

白樺樹液 牛歩戦術（関東軍も）

一、目が覚めて 友を起こせば 返事なし

毛布に包み 雪の埋葬

一、あわれかな 友が亡くなり 糧秣が

増える考へ 此の世の地獄

一、用をたし 故郷を偲び 空仰ぎ

狼遠鳴く 背筋が凍る

一、後一步 日本海に たどりつき

船を待ちつつ 友を葬る

一、半世紀 会いに来たぞ 墓標さげ

草木茂りて 蚊ブヨ闘う

シベリア墓参

一、祖国を離れ 海隔て

尊い命 六万余

酷寒凍土 シベリアに

平成三年 墓標さげ

異国の唄も 涙声

安らか眠れ 我が友よ

二、祖国に帰る 夢を見て

共に語った 帰りたい

シラミに吸われ葉なく

ノルマ課せられ重労働

毛布にくるまれ雪に伏す

鳴くは狼 身内なく

三、二十世紀 此の歴史

残酷悲愴 言葉なく

語り伝えて とこしえに

忘れてならん日本人

日本再建 基礎となる

永久(とわ)に伝えて 語りつく

シベリア抑留

(曲 北国の春)

一、終戦満州 北の果て

荒吹く酷寒の あゝシベリアの果て

北緯五十度は 骨まで凍りつく

夢でおふくろの 日焼け顔

半世紀前を思い出す 思い出す

糧秣事欠き葉なく つかつたなーひどかつた

なー

二、星空眺め 涙出る

ソ連収容 あゝシベリアの果て

無事に帰ると 言いだせないまま

別れてもう四年 姉妹

あゝ祖国に帰りたい 帰りたい

シラミに吸われ肌はこけ つかつたなー

二、雪解け待つの同胞達と

樹氷花咲く あゝシベリアの果て

家ではおやじと 弟二人が

たまには俺の事 話しているだろうか

あの当時を思い出す 思い出す

友は死に狼鳴けども身内なし

【執筆者の紹介】

大正十四年十一月二十九日

下津町方の小作農長男
生

昭和十五年より

海草南部青年学校在学
す

十九年六月

十月二十日

繰上げ徴兵で甲種合格
満州第六三四部隊入隊
(密山)

二十年四月

平陽の第八〇三部隊転
属

五月

八月十六日

九月

八面通飛行場挺身大隊
横道河子で武装解除
拉古に集結 作業大隊
編成

二十一年五月まで

八月

二十三年七月二十四日

アストリハンカ收容所
ラド收容所を経て
高砂丸で舞鶴復員 後
農す

現在もミカン作りをしながら製材工、ローリー運転

等元気に頑張っており、シベリア慰霊旅行には二度参加して戦友の墓捜しを行い、県支部役員として協力頂いています。

(和歌山県 林 三子雄)

シベリア抑留の記

鳥取県 谷村憲一

喜寿を過ぎ八十歳を迎えた私には、すべてが驚きと夢のまた夢である。静かに瞑想すれば「欲しがりません、勝つまでは」と勤勉節約の少年時代、「死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり、生死を超越して一意任務の完遂に邁進すべし」として戦った青年期、戦に敗れ屈辱の捕虜として強制労働に服した三年八カ月、戦場では傷つき倒れ苦しい断末魔の下から東方の祖国日本を伏し拜んで「万歳三唱」して去って逝った戦友達、極限の酷寒と飢餓線上をさまよったシベリア凍土の重労働等。戦争とは何か？ 敗戦とは何